

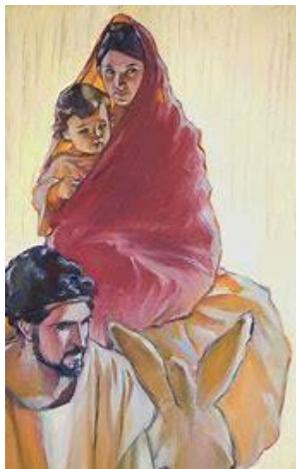
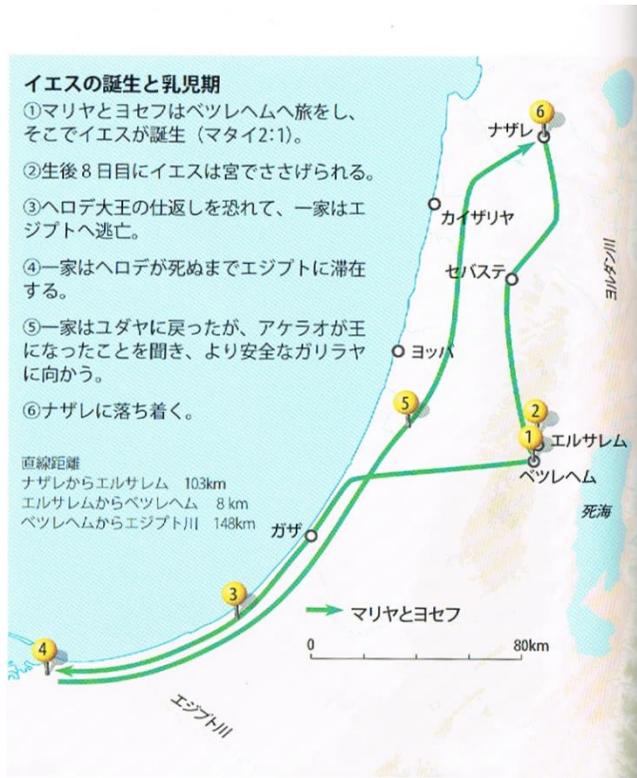
クリスマスおめでとうございます。今朝はキリストの誕生の次第ではなく、誕生したイエス・キリストの幼児時代の記事を取りあげます。前回、東方の博士達はお生まれになった救い主イエスに会い、帰りはまっすぐに自国に向かったということを見ました。博士達が約束を破ったと一方的に激怒したヘロデ王は、ベツレヘム周辺に住む二歳以下の子供達を抹殺しました。ヨセフとマリヤと幼子イエスは、危機一髪でエジプトに逃れ、救い主は守られました。ヨセフには、御使いより知らせがあるまで、その地にとどまるよう示されていました。

1. エジプトからイスラエルに (19～21節)

- ①ヘロデ大王の死 (19)「ヘロデが死ぬと、見よ、主の使いが、夢でエジプトにいるヨセフに現れて、言った。」ヘロデ大王は紀元前37～4年に、ローマ帝国を後ろだてにして、ユダヤ王として君臨していました。70歳近くまで生き、在位期間中は絶対権力者でした。そのヘロデがついに死にました。エジプトに逃れていたヨセフたちが、外国でどのような生活をしていたかはわかりません。どれだけの滞在になるかも見通せませんでした。しかし、1年が経つか経たないうちに、その日を迎えました。主の使いがヨセフに夢のなかで現れたのです。
- ②立って行け (20)『立って、幼子とその母を連れて、イスラエルの地に行きなさい。幼子のいのちをつけねらっていた人たちは死にました。』ヨセフへの主の使いの言葉はこうでした。「幼子のいのちをねらっていた、ヘロデが死んだので、すぐに準備して、幼子であるイエスとその母マリヤを連れて、イスラエルの地に戻りなさい」。御告げがある時というのは突然です。前触れもなく、このようなメッセージが与えられたのです。もしかすると、ようやくエジプトでの生活が軌道に乗り始めていた頃かもしれません。
- ③イスラエルの地に (21)「そこで、彼は立って、幼子とその母を連れて、イスラエルの地に入った。」しかし、ヨセフはためらいません。それがヨセフの信仰における美点でありましょう。彼はすぐに立って行動を始めました。幼子と母を連れてイスラエルに向かいました。まず向かおうとしたのは、ベツレヘムだったでしょう。ヨセフの本籍地ですし、イエスが生まれ、しばらく住んだ地でもあります。土地勘もあり、知り合いもいますから、自然にそちらに足が向いたと思われまます。

2. ナザレへの道 (22～23節)

- ①アケラオが (22)「しかし、アケラオが父ヘロデに代わってユダヤを治めていると聞いたので、そこに行くとどまることを恐れた。」



しかし、結果的には、ベツレヘムやエルサレムへの道には向かいませんでした。というのは、ヘロデ大王の息子アケラオがユダヤを治めているということを知ったからです。アケラオはヘロデ大王の四番目の妻マルタケとの間に生まれた子でした。紀元前4年から紀元6年までの治世でした。アケラオは父にも増して残忍であったということが知られていて、ヨセフもエルサレムやベツレヘムに行けば、子供の命を取られてしまうかもしれないと考えたのです。

これもまた主がくださった、良い判断でした。

②ガリラヤ地方に(22)「そして、夢で戒めを受けたので、ガリラヤ地方に立ちのいた。」ヨセフは夢のうちに、主から与えられた戒めによって、直接ガリラヤ地方に向かいました。元々、ヨセフもマリヤもナザレに住んでいたのですから、ガリラヤ地方に行くことは、もう一つの必然でもありました。ヨセフにしてみれば、大工の仕事を生業としていたのですから、それを再開していけば、生活はしていけるという見通しが立ったことも、彼の判断を前向きにさせる面があったでしょう。

③ホナザレの町へ(23)「そして、ナザレという町に住んだ。これは預言者たちを通して、『この方はナザレ人と呼ばれる。』と言われたことが成就するためであった。」ヨセフとマリヤと幼子イエスは、ナザレに身を置くことになりました。ヨセフ夫妻にとっては、よく知っている地ですから、すぐに新生活に入っていったことでしょう。これはまた、イエスが「ナザレ人と呼ばれる」と言われたことが成就するためでした。この預言の言葉がどこにあるかということについては、よくわかりません。

《結論》クリスマスの出来事といえば、昨晚の燭火礼拝において辿っていった

ように、預言、受胎告知、馬小屋での降誕、羊飼いたちへの祝福、東方の博士達への祝福といったことが挙げられます。しかし、その周辺にある出来事も見逃してはなりません。降誕されたキリストが危うくヘロデ王によって殺められる可能性のなかでエジプトに逃れたこと。ヘロデ王が命を終えた後に、ナザレの町に戻って来ることができた事実もしっかりと覚えておきたいのです。

第一に、この間、幼児のイエス・キリストは主によって終始守られていたということです。両親と共に、当時の道路事情などを考えても、赤子が長距離の旅をすることには、危険がありました。また外国であるエジプト滞在中も、食料が備えられ、健康が守られていました。さらに、一歳ほどの子が再度の旅をすることになりましたが、支配者が変わったばかりで、こちらも大変な事でした。しかし、ずっと守られていました。それは決して当たり前のことではなく、人間イエスはその幼児期に、危うい中に、その命が守られていたというのが重要なポイントです。それは、私たちが日々の歩みにおいて、守られて歩んでいるということが当たり前ではないということにもつながってきます。主に感謝します。

第二に、イエス・キリストが、健やかに生かされていったからこそ、キリストの十字架と復活の福音が成立したということです。福音があればこそ、人は罪の赦しと罪深い者が義と認められるという救いが備えられることになるのです。今朝は、この教会において、洗礼式が行われます。立証にもありましたように、洗礼へと導かれるにあたっては、不思議な主の御手がありました。そして、救いに導かれたのは、キリストの福音に基づいているということを確認することができます。よく、洗礼式の時に、私達は自らの洗礼のことを思い出し、原点に立たされると言われます。そうです。私たち一人一人も、キリストが若い時代を生き抜いて、公生涯へと進み、そしてついには十字架の上での贖罪の死を遂げるまで生きてくださったということに注目したいのです。今朝の洗礼への道が備えてられたことも本当に有難いことと思います。主を賛美します。

第三に、エジプトへの道、滞在、ナザレに戻されるという、一連の歩みにおいて、ヨセフはその度ごとに、尊い主の導きをいただ

いていたということです。それを別の言い方でいうならば、ヨセフは御霊に導かれて、進むべき道を進んで行ったということです。姉ヶ崎キリスト教会の今年の御言葉は「御霊によって歩みなさい」（ガラテヤ 5:16）でした。本日はクリスマス礼拝であるとともに、年末礼拝でもあります。そのことを覚えるにつけても、御霊によって歩んだヨセフという信仰者のあり方から学びましょう。ヨセフには、主からの促しを受ける用意があり、与えられれば即座に従って行動しました。「御霊によって歩む」ということは、主の御心を確信した時に、それに従うことなのです。お二人の洗礼への道も、主の促しに従うという大きな決断でありました。結果的に言えば、御霊によって歩まされた結果です。そして、誰でも霊的な促しをいただいているのなら、それを実行していきましょう。祈りへの一歩、信じることへの一歩、従うことへの一歩を踏み固めていきましょう。一年の初めの日ともいえる、このクリスマスの朝にこの志をもって始めてまいりましょう。